

ぼくはペットになりました

知名町立田皆小学校 六年 東 海成

「行ってきませう。」

ぼくは小さな声でそう言って、つり具を持ってすぐ近くの海に走って行った。

ぼくの名前は、たくや。小学六年。最近つりにはまっついていて、今日も親にバレないように海に来た。さつそくつりを始めたが、魚はいつまでたつてもつれない。

ぼくはジュースを飲んで魚がかかるのを待った。そして、飲み終わったペットボトルをほうり投げた。しばらくしてようやく当たりがきた。しかも大物だ！ぼくが引こうとするが、逆に強い力で引かれていく。ぼくはそのまま海の中に引きずりこまれた。ああ、助けくれ……。ぼくの声は泡となつて水面ではれつした。そのままぼくは、海の奥深くまでしずんでいった。

うっ、ぼくはどうなつたんだ？あのままおぼれ死んでしまったのか？いや、でも何かの感覚はある。んっ、何か聞こえる。ぼくは恐る恐る目を開けた。そこには、たくさんのお小さな魚たちがうれしそうにぼくを見ていた。

「やった、やったー。つれたぞー。」

えっ、じゃあぼくつられたの？しかも魚に……。マジかよ。そんな感じで動揺しているぼくを無視して、オレンジ色の魚が高い声で言った。

「ねえ、これ、ぼくが最初につつたから、ぼくが飼つてもいい？」

そうしたら、他の魚がいった。

「いいよ。そのかわりちゃんとお世話あげてよ。」

ぼくは首輪のような物をつけられ、オレンジ色の魚につれていかれた。その魚は言った。

「ぼくはカクレクマノミのポッポ。よろしく。あつ、そうだ！君の名前、何にしようか？」

ぼくにはもう名前がある。

「ぼくはタクヤだ。いい名前だろう。」

「えー、その名前はダサイよ。ゴン太にしよう。」

ダサツ。断つたがだめだった。残念だ。

「よしっ、ゴン太。サンゴ公園に散歩に行こう。」

とポッポがいきなりぼくを引っぱって行った。こうしてぼくは魚のペットになりました。

サンゴ公園に行った。とてもきれいなサンゴがいっぱいだ。サンゴがキラキラして、そのまわりを色あざやかな魚たちが楽しそうに泳いでいる。なんてきれい

なんだ。ぼくは感激した。でも、ポツポは悲しそうに言った。

「昔はもつと大きな公園だったってお父さんが言っていたけれど、海がよこれて少しずつ小さくなってきたんだ。」

ぼくは、こんなきれいなサンゴ公園が小さくなってしまふなんて、ショックだった。

それから、ポツポの家に帰って、えさのわかめをもらって食べた。おいしかった。

次の日、ぼくらは浅瀬に行った。浅瀬にはペットボトルのふたを背負っている奇妙なヤドカリがいた。

ぼくはそのヤドカリに聞いた。

「どうして貝じゃなくて、ペットボトルのふたを背負っているの？」

ヤドカリは言った。

「だってこれがたくさんあるんだもん。ごみがあるから貝殻を探すより、これを探すほうが楽なんだもん。」

ぼくは貝殻の方が似合うのと思った。

帰り道、ぼくは太ももにチクツとした痛みを感じた。それを見て、ポツポは言った。

「まったくもう。ゴン太はドジだな。ここは人間が捨てたつり針がたくさんあるから気をつけな。」

ポツポはそう言って、つり針を取ってくれた。

「この前は、鳥さんがひっかかって大変だったんだよ。」

ぼくはしばらく考えた。サンゴ公園の事、ヤドカリの事、つり針の事を……。

ぼくは、ポツポのヒレをぎゅっとにぎって言った。

「ぼく、海をきれいにする！ポツポたちが幸せに暮らせるような環境をつくるよ。」

「えっ、本当に？ありがとう。わーい、わーい。」

喜んでいるポツポを見ると、何だかこっちまでうれしくなってきた。

その時、とつぜん大きな網がやってきて、ぼくは連れさられてしまった。

「どうだい、魚はかかっているかい。お、重い。こりや

大物だ。わっはっはっ。あっ！魚じゃなくて人間の子どもか？おめえ、タクヤじゃないか。母ちゃん探してたぞお。」

ぼくはその後、漁船に乗せられ、家に帰ることができた。こうしてぼくの不思議な海の生活は終わった。

数日後……。ぼくは海に行つてジュースを飲んで

た。

「ぶはーっ、やっぱり潮水よりジュースの方がおいしいな。」

ぼくは、そのペットボトルをいつものように投げ捨て……は、しなかった。だってポツポと約束したから……。
明日はボランティア活動。海岸のゴミ拾いの日だ。

